

☆(1)に収載したエッセイは「Anarchism and Other Essays (Bombay, 4 Libertarian Book House を底本とした、十一編のうち序及び七編である。割愛したのは、〈ペリタニズムの偽善〉〈女の取引〉〈近代劇〉である。内容では収載した七編にそれぞれ分有されて居り、編者において適宜選択し、訳を付させて貰った。エッセイの初版は、Mother Earth Publishing Assoc. から一九一一年に刊行され、最近では一九七二年に〈Red Emma Speaks, edited by Alix Kates Shulman, N.Y. Random House & Vintage Books〉で出版されたという。

☆わが国では大正三年伊藤野枝が〈婦人解放の悲劇〉〈少数と多数〉〈結婚と恋愛〉それにヒツポリト・ハーヴェルが書いた〈エマ・ゴールドマン小伝〉を翻訳出版し、同じ頃と推察されるが、辻潤は〈フランシスコフェラと近代学校〉を翻訳している。

☆エッセイはいづれも判りやすく、エマの活動した範囲とテーマを示すものである。文中の人名、地名は特に註解していないが、彼女の言うように読者をへ述べられた理念から離れさすのを恐れるからであり、思想の総体的な把握を願う故でもある。

☆なお「婦人参政権」と「愛国心」の二点は、別の訳者をお願いし、翻訳の労をとっていただいた。ここに謝意を表します。

序

約廿一年前、わたしは初めて、偉大なアナキストの代弁者、無類のヨハン・モストの演説を聞きました。当時、またその後ずっと、わたしは話し言葉が大衆の中へ、あれほど立派な雄弁と熱狂と火を注ぎ、人間の心と魂から拭い去ることができないのをみたことはなかった。モストの集會に集った人びとのうち、彼の予言の声から離れた人があるでしょうか。きっとあの人びとは彼の話を聞いて、旧い信念を投げ捨て、アナキズムの真理と美を認めたに違いありません。

わたしの只一つの願いは、モストの舌端をもって話せたらーわたしもあのよう到大衆に訴えたい！と言うのでした。若い時代の熱狂とはなんと素朴なことでしょう！一番むづかしいことが、子供の遊びにみえるのです。あの時が生甲斐のある人生でした。でもその時期はまたなんと短命でしょう。春のように、宣伝者としての嵐の時代は弱く繊細で、それは境遇の変化に抵抗する諸力により成熟するとか殺されてしまう。

奇蹟をもたらずものとしてのわたしの話し言葉への信仰は失われました。話し言葉が思想とか情緒を喚起するのは不十分だと覺つたのです。漸次、それを自覺するには少なからぬ抵抗を感じたけど、演説による宣伝は民衆を無気力から揺さぶる手段としては最良でも、永続的な印象を残さないのに気づいたのです。集會に出席する多くの人は、新聞でセンセーションになって興味をもつとか、何か楽

しみを期待しているという事実は、あの人達が本当に学習したいという内的要求をもっていないのを証明しています。

人間の経験を書きとめる仕方はこれと全く違うのです。人は進歩的理念に強い興味をもたない限り真面目な本は気にもとめない。これはわたしの長年の公的活動による新しい発見でした。つまりこうです。教育について多くが要請されるけど、児童は自分の心の求めるものだけ受入れる。この真理は未熟な心に関連して、近代の教育家が認めています。大人についてもそれは真実だと思うのです。アナキストや革命家は音楽家ではないのです。やれるのは思想の種子を播くことです。そこから何か重要なものが発育するかどうかは、人間の土壌の豊饒さに依存するのであって、勿論、その種子の知的質だって看過できません。

集会での聴衆は、多くの重要でないものに気をまぎらす。話し手はどれ程、雄弁であつても、会衆の落着きのなさから通れられない、その結果、根源をつくのは失敗します。よくできたとして、自分に納得できない仕儀になります。

書き手と読み手の関係はもつと緊密です。本はわたし達がそうあつて欲しいというだけで、むしろ曲解するというのが真実でしょう。でもわたし達がそうしがちだという事が、話し言葉での表現に対し、書き言葉の重要さを示しているのです。かような考慮によつて、個人的また社会的な種々な主題につき、自分の考えを一冊にまとめました。それはいづれもわたしの廿一年に亘る心と魂の闘争を示すもので、多くの変化や内面での改訂のあとで得た結論です。

わたしはわたしの演説を聞いて下さった程、多くの読者があるとは、楽天的に希望しません。でもただ楽しむだけに來て下さる人より、本当に学習したい少数者にとどく方が好ましいのです。

この本についていえば、それ自体に語らせなければならぬでしょう。説明的註解は、述べられた理念から離れさすだけです。というのは、アナキズムは、未来にむけ鉄壁のプログラムや方法を設定するものではないからです。新世代はいづれも闘いと、屈服させなければならぬのに、過去が重荷になり、わたし達を網の中に入れ勝ちなのです。アナキズムは、少なくともわたしの理解する限りでは、子孫がその必要に応じて、それ自身の特殊な体系を発展させる自由を残しています。わたしたち達の活きいきした想像力でも、外的抑圧から解放された民族の可能性は予見できない。だとすれば來たるべき人びとの行動路線をどうやって線引きできるでしょうか。清らかで新鮮な空氣を求め高価な支払いをしているわたし達は未来にかせをはめる傾向は警戒しましょう。過去と現在のくだらないものを地上から掃除できたら、子孫にすべての時代の最大で安全な遺産を残すことになるでしょう。

一般読者について気落ちする傾向は、一つの作品から一つの文節だけ抜きだし、それでもって書き手の理念なり個性を測る基準にすることです。例えば、フリードリッヒ・ニーチェは超人を信じているから、弱者の憎悪者だときめつけるたぐいですが。そうした浅薄な解説者には、超人のヴィジョンが弱虫や奴隷の一族を産まない社会状態を巨人の心が呼びかけているのは判らない。

マックス・スチルナーは「自己にとつての個人であり、他の者は悪魔にとられる」の理論の信奉者にすぎないとするのは狭量な態度です。偉大な社会的可能性を含むスチルナーの個人主義は無視されている。にもかかわらず、社会が自由になるのは、解放された個人に依るのであって、その自由な努力が社会を作るのです。

これらの事例で、わたしの「少数者対多数者」にむけられた反論に立会いましょう。むしろ、わたしは大眾を、創造的要因としないため、民衆の敵として破門されましょう。でも民衆に与える餌とし

て、今はやりの扇動的陳腐さの罪よりそちらの方を選びます。わたしは抑圧され落胆した大衆の病気をよく知っていますが、患者に生かさず殺さずの、ありきたりの緩和剤を処方するのは拒否します。社会の病気を取扱うのにどれほど過激であつても過ぎることはない。過激なものほど、一般に真実です。わたしが多数者を信頼しないのは、個人の能力を信じるのを示すものです。個人が共通の目的にあて、自己の仲間を自由に選ぶなら、無秩序と不平等のこの世界からでて、秩序と調和への希望がもてます。

その他については、わたしの作品に語らせましょう。

—エマ・ゴールドマン—

アナーキズム

—本当は何を意味するのか—

人類の生長と発展の歴史は、明かるい夜明けの到来を前ぶれする、すべての新らしい理念の恐るべき闘争史でもある。伝統を頑固に固執する旧時代は、新時代がどんな時期と形態で出現しようと、その前進をはばむのに、最も汚いまた残酷な手段を、ためらうことなく用いる。すべての進歩的理念の道筋に置かれた反対の極悪非道、困難、苦勞を自覚するには、遠い過去に踏み分けて行く必要はないのです。拷問台と親指締め具、それに刑罰の鞭はいまだにわたし達の側にある。そこでは囚人服と社会の憤激が、隠やかに前進する精神に向け反対するのだ。

アナーキズムは、他のすべての革新の理念と同じく、この運命を遁れ得なかった。事実、最も革命的で非妥協の革新者—アナーキズムは、それが再建しようと目算している当の言葉に含まれた無知と毒の組合わせに遭遇しなければならなかったのです。

アナーキズムに反対して言われていること、行なわれている事柄を間接的に取扱つても、一卷の書物を書かねばならないでしょう。そこでわたしは、二個の主要な反論だけ当つてみよう。それによつて、アナーキズムが本当は何を意味するのか説明しようと思うのです。

アナーキズムに反対する奇怪な現象は、いわゆる知性と無知の關係に光をもたらすのです。けれど、すべて物事は相対的なのを考慮に入れると、これだつてそれ程奇怪ではありません。無知な大衆は、

知識だとか寛容をひけらかさない点で有利です。いつものように単なる衝動で行動するから、理由も「何故だ?」とか「どういう訳だ?」と子供のようです。それでも無教育な人のアナーキズムに対する反論は、知識人のそれと同じく考慮に価するのです。

では、その反論とはどんなものでしょうか。第一、アナーキズムは美しい理想だけど、実現性がない。第二、アナーキズムは暴力と破壊を意味する、だからそれは悪く危険だと非難されるべきだ。知識人と無知な大衆は両方とも、問題を理解して判断するのではなく、噂さや間違った解釈によって判断しているのです。

オスカー・ワイルドの言うのによれば、実際の計画とは、現状において既に実現したものか、または実施できる計画である。けれど人が反対するのは、実に現状であり、またさような現状を受入れた計画は間違いで、くだらない。それ故、実際的なものの基準は、実施できる計画が悪くてくだらないものに手をつけないかどうかじゃなくて、その計画は、古い停滞した水辺から離れて、新生活を建設し維持して行く活力を充分もっているかどうかにかかっているのだ。この考えに照らせば、アナーキズムは実に実際的である。他の理念以上に、悪くくだらないものを排撃する。また他のどの理念より、新生活を建設し維持するものなのです。

無知な人の感情は、アナーキズムについての血も凍る物語りで絶えず血を湧きたたせています。これ程、この思想とその解説者に対して行使される侮辱は他にありません。それ故、アナーキズムは無思慮な人にとって、悪人が子供に仕出かす教訓——一切を喰い尽す黒い悪魔——いはば破壊と暴力を意味するのです。

破壊と暴力! どうして普通の人は、社会における最大の暴力とは無知であり、破壊力こそ、アナ-

キズムが闘う当の敵だということが判らないのでしようか。その人はまた、アナーキズムはその根が自然の諸力の部分であつて、社会の生命のエッセンスに寄生する健全でない下地を破壊するのだとは知らないのです。アナーキズムは雑草やヤマヨモギを切除するだけで、それによって健全な果実をつけるためなのです。

ある人が、考えるよりきめつける方が心理的努力は要しいと言った。社会にひろがっているこの種の心理的怠惰をみれば、それは全く本当です。何か所与の理念の基底を探らず、その起原とか意味を検討しないで、多くの人びとは、排撃したり、非本質的な幾つかの表面的なものまたは偏見に依りがちなのです。

アナーキズムはすべての仮定を考え、研究し、分析するよう要請する。でも平均的読者の頭脳力に余り多くの負担はかけられないので、わたしがまず規定し、後程、説明しましょう。

アナーキズムとは、人為の法律に拘束されない、自由に基づく新社会秩序思想である。その理論によれば、すべての政府形態は暴力に準拠している。またそれ故、悪であり有害で不要である。

この新社会秩序は、むしろ生活の物質的基礎に拠っている。しかし、すべてのアナーキストが一致するのは、今日の主要な悪が経済悪であり、その悪の解決は生活の全面——個人的であると同時に集団的なもの——内面性と同時に外面性を考慮することによってのみ招来できるとするのです。

人類の発展史を詳細に閲覧すると、二要素が相互に死闘しているのが判りました。その要素は、今ようやく理解され始めたばかりで、相互に異質な訳でなく、適当な環境に置かれると、むしろ緊密に関係づけられ、本当の調和に至るものです。それが個人的本能と社会的本能です。個人と社会は長年に亘って、休みのない血闘をつづけ、お互いに主権を求めました。それと言うのも、それぞれが他

方の価値と重要性に盲目だったからです。個人的本能と社会的本能は個人の尽力にとって、つまり成長と熱望と自己の実現にとっての最重要な能力であり、社会的本能は相互扶助と社会的な福祉にとって、等しく重要な力です。

個人の内面、そして彼と彼の環境で荒狂う嵐の説明は、これ迄の所探求されていない。自己が理解できず、生の全き統一についても判らない原始人は、いつでも彼を嘲笑し、弄ぶ盲目的な隠れた諸力に依存しているのだと思っていました。この在り方から、完全な降伏によってだけなだめられる、天の優越な諸力に依存した、一本の塵のように、人間についての宗教的観念が成長したのです。すべて初期の賢者達はこの理念に留まり、それが人間と神、人間と国家、人間と社会の關係を取扱った聖書物語の動機になりつづけたのでした。人間は無であり、権力が一切である。この同じ動機が繰返された。こうしてエホバは人間が完全に降伏するという条件でだけ寛容だった。人間は地上のすべての光栄をもつことができる。だが自己を意識してはいけな。国家、社会、道德律は同じ繰返しを歌うのです。人間は地上のすべての光栄をもつことができる。だが自己を意識してはいけな。

アナーキズムは人間に自己を自覚させる唯一の思想です。それは神、国家、社会は存在しない、それらの行う約束は、人間の従属によってだけ完成するのだから、虚であり、無であると主張します。それ故アナーキズムは、自然においてだけでなく、人間においても、生の統一の教師です。そこでは個人の本能と社会的本能との間に闘争はなく、丁度、生命の貴重なエッセンスを受容する心臓と、そのエッセンスを純粹に強力に保つ要素の貯蔵所である肺との間には闘争が存在しないようなものです。個人は社会の心臓で、社会生活のエッセンスを確保する。社会は生命のエッセンスを確保する要素——即ち純粹で強力な個人——を配分する肺なのです。

エマーソンは言った。「世界において価値あるものとは、活動的な魂である。これは各人の内部に含まれている。活動的な魂は絶対的真理をみて、真理を語り、創造する。別言すると、個人の本能は世界において価値あるものです。真実は魂が生きた真理をみて創造するが、それはより偉大な真理、再生した社会的魂なのです。

アナーキズムは人間を捉えてはなさない幽霊から人間を解放する偉大な解放者です。個人と社会の二勢力の調停者であり、和解者です。その統一を完成するため、アナーキズムは、個人的と社会的本能、個人と社会の階調ある混和を阻害する悪しき影響に宣戦布告をしたのです。

宗教は人間の心の支配者、財産は人間の必要の支配者、そして政府は人間の行為の支配者です。それらが人間の隷属とそのもたらす恐怖の根城なのです。宗教！どれ程人間の心を支配し、人間の魂を傷つけ墮落させたことでしょうか。神が一切である。人間は無だ。宗教はそう教える。でもその無から神は専制的な、暴君的で残酷で恐るべき王国を築き、神が始まってからは、苦悩と涙と血が世界を支配する以外のなものも作らなかつたのです。アナーキズムはこの黒い怪物に対する反逆へ立ちあがらせた。あなたの心理的かせを打破れ、あなたが自分のために考え、判断しない限り、進歩の最大の障害である、闇の支配から遁れ得ないだろう。アナーキズムは人にそう語るのです。

財産、それは人間の必要を支配し、他人が必要を満足させる権利を否定する。財産は神権だと宣言された時代があった。その時人に向つて、宗教と同じように繰り返したのです。犠牲を捧げよ、放棄せよ、服従せよ！アナーキズムの精神は人間をその平身低頭の地位から引きあげました。今ではまっすぐに起ち、彼の顔を光に向けている。人は財産の飽くない、強欲で荒廃した本質を知つて、この妖怪を倒そうとしています。

「財産は盗奪である」とフランスのアナーキスト、ブルードンが言った。そうです。泥棒にとっては危険のない盗奪です。他人が蓄積した労力を専断する財産は、彼から生きる権利を奪い、貧困者や追放人にしてしまう。財産は、人がすべての必要を満足させるだけのものを十分に創造していないという。手垢のついた言訳けにもなりません。経済学の初心者でも最近の労働生産は、正常な需要をはるかに上廻っているのは知っています。けれど正常でない制度によって、正常な需要とは何でしょうか。財産が認める需要とは、より大きな富へのどんな欲望である。というのは富は力で、力は屈服させ打碎き、搾取し、隷属させ、その力が侮辱し、墮落させるのです。アメリカは特に偉大な力、その巨大な国富を誇っている。不幸なアメリカ、もしこの国を構成している個人が酷く貧乏しなければ、国富になんの徳があるでしょうか。人びとが汚なくむさくるしい、犯罪に埋もれて生き、希望と欲びがなく富と土地のない人間餌食の大軍だとすれば、国富が何になるのでしょうか。

どんな事業でもその報酬が投資にみあわなければ、破産は必定だと一般に認められています。けど富の生産に従事する人びとは、この単純な教訓を学んでいないようなのです。毎年、人命における生産費は大きくふくれあがっている。(昨年、アメリカでは五千人が死に、十万人が傷害を受けている)富の創造を助けている大衆への見返りはだんだん少なくなっているのだ。それでもアメリカはその生産事業の必然な破産に眼をつぶりつづけています。それだけが富者の犯罪ではない。更に重大なのは、生産者を機械の部品に過ぎなくさせ、主人が鋼鉄であるのに反し、貧者の意志と決定は無にされているのです。貧者は自己の労働の所産を奪われるだけでなく、自由な主導性と独自性、自分の作っているもののえの興味や熱情を奪われているのです。

本当の富は、有用で美しいもの、強力で美しい事物、そして住みつきたいと思う環境を造りだすの

に助けとなる創造の中にある。けれど、もし人が三十年の生涯に亘って、糸まき機に綿糸をまきつけるとか、石炭を掘るとか、道路建設に従事するなら、国富は話しになりません。そこでは、人がこの世に与えるものといえば、生きるには弱すぎ、死ぬには億病な暗鬱で酷い生存を映しだした灰色の酷いものだけなのです。奇妙なことと言えば、かような生氣のない、集中生産方式が、わが時代の産みだした成果だと賞揚する人のいることです。その人びとは、わたし達が機械に隷属しつづけるのは、王様に従うよりもっと酷い隷属になるのが判らない。つまり集中方式は自由の寝棺であるだけでなく健康と美、芸術と科学の死の床で、これらのすべてが時計仕掛けや機械的状況では不可能になるのを知らないのです。

アナーキズムはさような生産方式を拒否する。アナーキズムの目標は、個人の隠れた能力の最自由で可能な表現である。オスカー・ワイルドは、完全な個性とは、完全な条件の下で発達する人間、傷害を受けず危険にさらされない人間、¹だとしている。さすれば、完全な個性は、人が仕事の様式、働く条件、働く自由を自由に選ぶことのできる社会状態においてだけ可能なのです。テーブルを作る、家を建てる、土を耕す、こうしたことが人にとって芸術家の描く絵や科学者の発見に等しくなれば、つまり、ひらめきとか強い熱望、創造力による仕事への興味などの結果になる訳です。それこそアナーキズムの理想で、その経済的配置は、自発性の生産・分配組合を構成し、それが人間のエネルギーの最少を費して生産する最良の手段として、自由なコミュニケーションズムへと漸次、展開するのです。しかし、またアナーキズムは、個人の権利を個人の数だけ認め、いつでも人の趣味と希望に調和するような仕事の形態を整えます。

人間のエネルギーのこうした自由な発揮は、完全に個人的で社会的な自由の下でだけ可能です。ア

ナーキズムはすべての社会的平等にとつて、第三者的な最大の敵、言うならば、国家、組織された權威、法令等、人間の行為を支配するものに反対する方へ、その諸力を差しむけるのです。

丁度、宗教が人間の心にかせをはめたように、財産とか専断が人間の必要を屈服させ、硬化させたように、国家は人の精神を隷属させ、行為のすべての面を規制します。へ総じて政府というものは、本質的に横暴だ」とエマーソンが言っている。神権によるうと大多数者の規則に準じようと、政府は同じです。どんな事例にせよ、政府の目的は個人の絶対的な服従なのです。

アメリカ政府に言及して、偉大なアメリカのアナーキスト、デヴィッド・ソーローは言う。

「政府は一個の伝統に過ぎなく、最近のは傷つくことなく後世に移管しようと努めているが、どの事例でも政府はその完全無欠性を失い、精力や一個人程の力さえもっていない。法律は、人間を少しも正しく導かない。法律に対する敬意によつてさえ、隠健な人びとが毎日、不正の徒になつて行く」

全く、政府の基調は不正なのです。何も悪事を働かない王様の尊大さと自己満足でもつて、政府は布令をだし、裁判を行ない、宣告を下し、大したこともない犯罪者を処罰するが、政府自体は、個人の自由を無にする大きな多くの犯罪者によつて維持されているのです。そこでオイタ嬢は正しく言った。へ国家は、公衆の中に国家の要求に従い、国庫を充す性質だけを植えつけるのがねらいである。その最大の偉業は人間を時計仕掛けにすることだ。そうした環境では、すべて繊細で洗練された自由——それらは適切な処置と広い活動分野を要請する——が当然枯涸して壊死する。国家は故障のない収税機関、赤字を出さない大蔵省が必要で、公衆と言へば、二つの壁で両側をさへぎった真つすな道路を退屈そうにおとなしく、生気のない腑抜けの羊の群れになりさがるのが要求される。」

例えおとなしい羊の群れでも、国家がその目的に宛て、墮落的で横暴な抑圧手段を用いれば、国家

のごまかしに抵抗します。それ故、バクーニンは、国家とは個人または少数者による自由の圧制者、それ自体の拡大のためには、社会関係を破壊し社会の生命さえ削減したり完全に否認する。国家は宗教の祭壇と同じく政治的自由の生けにえの祭壇、人間を犠牲にするために維持されるものと非難しています。

事実、政府とか組織された權威、すなわち国家は、財産と専断を維持するのに必要なだけとする点で、近代思想家は大体一致している。その機能においてのみ有効なのです。

フェビアン主義の下で、国家の奇蹟を希望した、ジョージ・バーナード・ショールでさえ、へ現状での国家は、巨大な収奪機関であり、野蕃な力によつて、貧者を奴隷に駆り立てている」と言います。事情はそういう訳けです。だから賢い前口上者は、貧困がなくなつても、国家を支持するのです。

不幸なことに、多くの人は政府が自然法に基づくとの信念を持つてゐる。つまり国家は社会秩序と調和を維持し、犯罪をなくし、悪賢いのが仲間からまきあげるのを防止するためにあるのです。そこでわたしは、その主張を検討してみよう。

自然法は人間の内にある一要因であつて、何らの外的力にかかわりなく、自然の要請に調和して、それ自体を自由にまた自発的に肯定するものである。例えば、栄養、性的欲び、光、空気、運動についての要請は一個の自然法です。けれどその表現として、政府機関、棍棒、銃、手じょう、刑務所などを要しません。さような法に従うのを、順法と呼ぶなら、自発性と機会だけが要請されるのです。ところが政府なるものは、さような調和的要因で維持できないため、生きのびるために政府はこぞつて暴力、強制、圧力を活用するのです。そこでフラックストーンがへ人定法は無効である。なぜなら自然法に反するから」と言つたのは正しいのです。

数千人の虐殺の後で、ワルシャワに秩序ができたように、政府に秩序や社会的調和の能力を付与するのはむづかしい。従属や恐怖によって作られた秩序では、安全は保障しがたく、政府が維持されるのは、そうした「秩序」によるのです。けれど本当の社会的調和は、利益の連帯から自然に生まれる。いつも働く人が何も持たず、働かない人がすべてを享樂する社会では、利益の連帯は存在しない。そこでの社会的調和は、神話でしかなくなるのです。この重大な状況に、組織された権威が対応する唯一の道は、すでに地上を専断する人びとにより大きな特権を与え、もたない大衆を更に隷属させることでした。こうして政府という兵器庫は、法律、警察、軍隊、法廷、立法機関、刑務所から成り、社会における最大の敵対要素を「調和」させようと途方もない努力をします。

権威と法律についての不条理な言訳けは、それらが犯罪をなくすと言うことでしよう。国家自体が最高に犯罪的で、あらゆる成文法と自然法を破り、税金の形で盗み、戦争と大逆罪の形で人を殺すのを別にしても、犯罪に対応するのは全く無力です。それ自体がつくりだす恐るべき災厄を破壊どころか低減するのさえ全くできないのです。

犯罪とは方向を誤った活力です。現代のあらゆる制度、経済、政治、社会、道徳等が人間の活力を悪い筋道へ誤導する限り、多くの人が、やりたくない事をする場違いにいて、生きたくもない生活をしなければならぬ限り、犯罪は必定で、法令の上にあるすべての法律は、犯罪を増しこすだけ、なくしてはしないのです。現在の社会は、絶望の経緯、貧困、恐怖、恐るべき闘争を知っている。当然人間の魂は犯罪と墮落へと向うのです。この醜い成行きが判る人なら、P・クロボトキンの次の言葉に必ず真理をみつけるでしょう。

「恩恵の間に均衡を保つ人びとは、こうして法律と処罰に依存し、法律と処罰の墮落を人類に帰せ

しめる。腐敗の奔流を認める人びとは、犯罪を暴露する助けになるとの口実で、政府から現金を貰い、ユダのおかけを蒙った密告者を社会にそそぎ込む。だが刑務所へ入り、自由を奪われた人間がどうなるか、粗野な看守の世話になり、荒々しい酷い言葉と、沢山な突きさすような、また骨身にこたえる屈辱に付された人なら、刑務所の全機能と処罰は、終らさなければならぬ、いまわしいものだという、私達の意見に同意するだろう。」

怠惰な人間に及ぼす法律の抑止的な効果は、考える値打ちもないものです。もし社会が怠惰な階級を養う無駄と費用から免がれ、またこの怠惰な階級が要求する保護の付属品の費用から等しく免れるなら、社会的分配表は、一時的な怠け者も含めて、すべての人びとに豊富さを約束するでしょう。その上、怠惰が特権によるのか、生理的、心理的異常によるのか考えるべきです。現代の不健全な生産方式だと前二者を助長しているが、驚くべき現象はそれでも人びとが現に働くのを希望することです。アナーキズムは、労働からその死ぬほどの退屈な面、灰色の強制面を取除くのを意図している。そして、労働が喜びであり、力強く、色彩にみち、本当の調和になるよう、そうすれば最も貧しい人でも労働の中にリクリエーションと希望をみつけだすに違いないのです。

生活をそのように調整すれば、不正と思いつき、抑圧的手段を伴う政府は必要でなくなる。いくらくよくても、政府は個人的社会的差異や要請にかかわりなく、すべての人に生活の単一な様式を押しつける。政府と既定法を破壊することで、アナーキズムは権威によるあらゆる抑制と侵犯から、個人の自尊と独立を救出するよう提案するのです。自由の中でこそ、人はその完全な地位にまで成長します。自由の中でこそ、人は考え行動し、自己の最善を差出すのです。自由の中でこそ、人びとを結束している社会的紐帯の本当の力を自覚するだろうし、それこそ正常な社会生活の本当の基盤です。

人間性とは何だろうか。それは変えられるでしょうか。もしできなければ、アナキズムでは耐えられるだろうか？

不幸な人間性、お前の名によってどんな酷い犯罪が行なわれたことだろう！どんな馬鹿でも王様から警官に至るまで、平凡な人からヴィジョンのない科学のアマチュアまで、人間性についてもつとらしいことを言う。心理的な大ばら吹き程、人間性の悪と弱さを強調するのです。けれど今日、刑務所にいる人びと、かせをはめられ、傷つき、不具にされた心をもつ人びとに対して、誰が人間性を語るのでしょうか？

ジョン・ビュローは閉じこめた状態での動物実験は、絶対に無効だと言う。その動物達の性格、習慣、欲求は、生棲地や森から切離せば、完全に変ってしまう。だとすれば、狭い場所に閉じこめられ、毎日屈辱へと鞭打たれている人間性について、その可能性を言及できるでしょうか。

自由、ひろがり、機会、そしてなによりも平和と休息、こうしたものだけが、わたし達に人間性の真実で有力な要素と、驚くべき可能性のすべてを教えて呉れるのです。

それ故、アナキズムは、本当は宗教支配からの人間の心の解放、財産による支配からの人間の身体の解放、政府の足かせと抑圧からの解放を意味するのです。アナキズムは真実な社会財の生産を目的とした、個人の自由な諸グループに基礎を置いた一個の社会秩序を意味します。その秩序は、すべての人に、個人的な熱望、趣味、傾向に従って、土地を自由に手に入れ、生活必需品の十分な享受を保障するでしょう。

これは無謀な幻想だとか心の錯乱ではない。世界中の知性をもった男女の多くが到達した結論であり、近代社会の諸傾向を精密に研究観察した結論なのです。即ち個人的自由と経済的平等は、人間の

中にある洗練された真実なものを産む双生の勢力です。

方法について。アナキズムは誰かが考えるような、神聖なひらめきによって実現されるべき未来論ではない。それはわたし達の生活事情の中での生きた力で、絶えず新しい条件を創出して行くのです。だからアナキズムの方法は、あらゆる条件の下で実施され得る鉄壁のプログラムではありません。方法は各地域とその風土、個人の知性と気質条件、経済的要素から成長すべきです。トルストイのような人の晴朗で穏やかな性格は、ミハイル・バクーニンとかP・クロポトキンのような人の強力で溢れるような人格とは、社会再建の方法において異なる訳です。同じく、ロシアの経済的政府の要請は、英国とかアメリカでのよりもっと激烈な手段を求めます。アナキズムは、軍隊教練や画一性を意味しない。しかし、人間の成長を阻害する一切に対する、反逆精神はどんな形にせよ表明する。全アナキストが一致するのは、その点であり、また偉大な社会変革をもたらす手段としての政治機関に反対するのでは同意している。

へすべて投票は、一種のゲーム、チェスとか西洋すごろく、右か左かの遊びである。その義務は便宜以上のものではない。正しい事柄に投票しても、何もしたことになる。賢者は、正しい事柄を偶然に委せたり、多数者の力によって、流布させようとは思わないのだ。ソローが言っている。政治のしくみとその功績を詳しく調べると、彼の意図は支持されましよう。

議会主義の歴史は何を示しているでしょうか？失敗と敗北以外の何ものでもなく、民衆の経済・社会のストレスを改良したとかやわらげた例はないのです。労働を改善し保護するため、法案が通過して制定された。ところで去年イリノイ州で判ったのは、炭鉱を保護する厳しい法律が、最大の炭鉱事

故になったのでした。児童労働法のある諸州では、児童に対する収奪が最高で、労働者が十分な政治的機會を享受する所で、資本主義は厚かましきの頂点に達します。

善意の社会主義者である政治家が叫ぶように、例え労働者が代表を持ちえたとして、彼等にその真摯で良い信念を実現する機会があるでしょうか。心に留めておくべきは、政治の過程で実現しようとする善意の道筋には、裏面の策動、謀略、おべつか、嘘、詐欺など落し穴が一杯です。事実、あらゆるごまかしによって、政治的野望家は成功するのだ。かように性格と信念を全く駄目にする他、人間の義務怠慢から何の希望が持てるでしょうか。幾度も民衆は騙まされながら、最後の一かけらまで政治家に希望をかけ、信頼して信じ支持するのですが、いつだって裏切られあざむかれるのです。

高潔な人は政治のひき白でも墮落していいと言われるかも知れない。そうじゃないんです。多くの事例で判っているのは、さような人達は骨折りに見合うだけの僅かな影響力さえ尽そうとしても無力なのです。国家が公務員の経済的主人です。善良な人びとは、もしそうした人がいるとして、自分の信念に忠実なまま経済的支持を失う。もし経済上の主人にかがりつくなら、善い事は何一つ出来ないのです。政治の檜舞台では、代替はきかない。馬鹿か悪党になる他はないのです。

政治上の迷信が大衆の心情を未だに捉えているけれど自由の本当の愛好者達は、それなしでやって行くでしょう。実際、スチルナーを信ずる人は、欲しいだけの自由を持っています。それ故、アナーキズムは、経済、社会、道徳の低下をもたらすあらゆる法律と抑圧に対して、直接行動、反抗的挑戦、抵抗を示すのです。そうしたものに對する反抗と抵抗は非法法です。だがそこに人間の救いがある。すべて非法法のもものは、高潔、自尊、勇気を要請する。つづめて言えば、自由で独立な精神に呼びかける。なぜならへ人は以合いの人を求める。土性骨のある人に手はかけられないからです。

普通選挙自体がその生存は直接行動に訴えてできたのでした。もし反抗の精神によらなかつたら、アメリカの革命的父祖達が挑戦しなかつたら、あの人びとの後胤は未だにすり切れた王様の上着にすがりついていたことでしょう。もしジョン・ブラウンと彼の同志達の直接行動がなかつたら、アメリカでは未だに黒人の肉を取引きしていたでしょう。実のところ、白人の肉は取引きされている。けれどもそれも非暴力直接行動によって廃止されるべきでしょう。現代剣闘士の経済的円形闘技場である労働組合もその生存は、非暴力直接行動に負うています。法律と政府が労働組合運動を破り、人間権利の擁護者を反逆者として、刑務所送りにしたのは最近の出来事です。もしあの人達が訴えたり、請願したり、妥協していたのなら、今日でも労働組合はあるかなしかの存在になっていたでしょう。フランス、スペイン、イタリア、ロシア、いいえ英国でも、英国の労働組合の戦闘性は強化されつつある。直接的、革命的経済活動は産業の自由を目ざした闘争の場で、強力になったので、世の中は労働力の重要さを認識しはじめたのです。労働者の経済的意識の表現であるゼネストはつい最近までアメリカでは冷笑されました。今日、すべて大きなストは、勝利するためのもので、連帯を要する一般の抗議だとして重要視されている。

経済路線で効果を証明した直接行動は、個人の環境でも等しく有効です。百の力が個人を侵犯したとして、彼がそれに対し執拗に抵抗するなら、自由になり得るのです。仕事場での悪しき権威に反対する直接行動、無法な法律の権威に反対する直接行動、道徳律の間違ったおっせかいに反対する直接行動、これらはアナーキズムの論理的、首尾一貫した方法です。

それは社会的革命に導かないだろうか。むしろ導きます。本当の社会変革は、革命なしにはやって来ないのです。民衆が自分の歴史を熟知していないと、社会革命は思想が行動になったものに過ぎな

いのが判らない。

思想の偉大な原動力、アナーキズムは、今日、人間活動のあらゆる面に浸透しています。科学、芸術、文学、演劇、経済的福祉を求めている努力等、事実、現存の事物の無秩序に対する個人的社会的反対は、アナーキズム精神の光によって照射されている。それは個人の主権の哲学であり、社会調和の理論です。アナーキズムは、世界を再建する偉大なうねりの生きた真理であり、夜明けの先導者になるでしょう。

少数者対多数者

現代の傾向を要約すれば、わたしは量だと云いたい。多数者、大衆の精神が至るところを占領して、質を破壊している。わたし達の全生活―生産、政治、それに教育―は量、数量によりかかっている。以前は自分の仕事の完全無欠と質に誇りをもっていた労働者は頭腦のない、競争にならない自動人形にとって代られ、これが自分等にとって無価値でその他の人びとにとっても全般に有害で巨大な量の品物を作りだしている。こうして、人生の快適さと平和を加える代りに只ただ人間の重荷を増しているのである。

政治において、ただ量だけが数えられる。しかもその増加に比例して、原理、理想、正義、高潔さは定足数の整列によって完全に駄目にされている。主権の争いにおいて、種々の政党はお互いに術策、欺瞞、巧妙、暗い陰謀を使っているが、それは成功した者が勝利者として多数者から賞讃されるのを確信しているのである。それこそ成功が唯一の神だ。何を代償にしても、どんな酷い代価を性格に及ぼしてもかまわない。この悲しい事実を証明する証拠を探がすのに手間はかかりません。

以前は腐敗がこれ程ではなかった。わたし達の政府の完全な墮落は徹底的に露呈しました。これまで米国民は長年批判の外に在って、諸制度の大黒柱とか、民衆の権利と自由の真の擁護者とか、呼ばれてきた政治団体のユダ的性格に直面したことはなかったのです。